**腸管出血性大腸菌感染症　Ｏ１５７とは**

大腸菌のほとんどは下痢の原因になることはありませんが、なかには下痢など消化器症状や合併症を起こすものがあり「病原大腸菌」と呼ばれています。病原大腸菌の中には、毒素を産生し、出血を伴う腸炎や、溶血性尿毒症症候群（ＨＵＳ）を起こす腸管出血性大腸菌と呼ばれるものがあります。Ｏ１５７は、この腸管出血性大腸菌の代表的な菌です。

溶血性尿毒症症候群（ＨＵＳ）とは、様々な原因でおこる急性腎不全のことです。

腸管出血性大腸菌は、菌に汚染された飲食物を摂取することや、患者さんの糞便に含まれる大腸菌が直接または間接的に口から入ることによって感染します。腸管出血性大腸菌は50個程度の菌数でも感染するといわれていますが、会話や咳、くしゃみ、汗などでは感染しません。

感染者の約半数は、3～5日の潜伏期間ののちに水様便（水っぽい下痢）が頻回に起こり、さらに激しい腹痛を伴い、まもなく血便（血液の混じった下痢）が出ます。特に子どもと高齢者では、溶血性尿毒症症候群（ＨＵＳ）や脳症を起こしやすいので注意が必要です。Ｏ１５７に感染しても、全く症状のないものから軽い腹痛や下痢のみで終わるものもあり様々ですが、無症状や軽い下痢で終わる場合でも、便には菌が混じって排泄されていますので、家族に感染を広げないよう十分な注意が必要です。

参考：腸管出血性大腸菌Ｑ＆Ａ（厚生労働省ホームページ）

****

問い合わせ先

松山市保健所　保健予防課

感染症対策担当

TEL　９１１－１８１５

FAX　９２３－６０６２